

第2篇 ポイントの発達とその意義

鈴木 道之助

1 はじめに

ポイントの発生は、縄文時代初頭における弓矢の出現とともに従来とは全く別の新しい器種を生みだし、狩猟部門の新しい発展を画期づける重要な問題の一つである。ポイント文化期の歴史的な意義づけは既に稲田孝司氏により精緻に分析されており(稲田1969)、それまでの現象論的な記述に止まっていたポイント文化を一挙に理論的に体系づけ、社会構造の変革にまで言及している。しかし、先土器時代の研究はその後、武蔵野台地での多数の文化層を重複する大規模な調査事例の増加とともに著しい進展を示し、また縄文時代への移行期の研究も無視できない存在となっている。先土器石器群におけるポイントの位置づけが再検討されるべきであろう。先土器時代の研究は限定地域での緻密な遺跡内のセトルメントの構造、遺跡間のセトルメントパターンへの発展という大きな命題をもっているのであるが、大きな視野をもった先土器文化の流れを知ることと言うまでもなく重要である。本小論は標題の「考古学上よりみた房総古代文化の解明」とは大きく逸脱する部分もあるが、稲田論文を基礎に先土器時代後半期の若干の問題について触れてみたい。

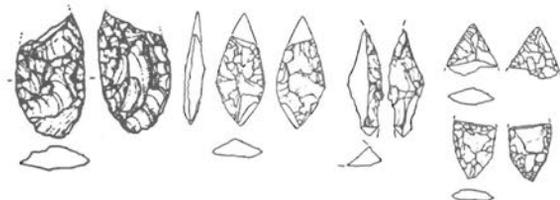
2 ポイントの出現

ポイントの出現には大きく分けて3つの異った見解がある。その1は戸沢(戸沢1965)、稲田氏に代表されるようにナイフ形石器からポイントへの形態変化が切出形石器を仲介としてなされたという見解、但し、戸沢氏は月見野遺跡の調査以後、片面調整から両面調整へという生成過程に疑問をもちだしてきている(戸沢1971)。その2は白石浩之氏の船底形石器、角錐状石器、関型石器と呼ばれる断面三角形の分厚い片面加工のポイント状石器(通称ゴロゴロ)が面的加工品であること、初期ポイントの大半が断面三角形であること、片面加工品であること、平坦剥離手法を採用していること、石刃状剥片及び横長の剥片の両方を素材としていることから角錐状石器と尖頭器は同系統の石器であるとし、周縁加工のポイントは尖頭器流入による形態変化であろうと理解する説(白石1974)。その3は宮塚義人、矢島国雄、鈴木次郎氏の外在的な要因と考える見解である(宮塚他1974)。

さて、層準的に捉えられたポイントの初現期のものは、本蓼川L2(宮塚他1974)、月見野第I BB1、同第II BB1、同第III A BB1(明大考古学研究室他1969)、西之台LOC・B IV中層(注1)、野川IV2(小林・小田他1971)であろう。特に本蓼川、西之台の両遺跡は現時点では最も上限のものようである。いずれも両面加工の整ったポイントがいきなり出現してい

ることは注意されよう(第1図)。所謂、切出形石器はポイントよりも若干遡り野川IV3bに出現するが、細石器が使用される直前まで存続する。つまり殆んど相前後して出現し、極めて長期間にわたってポイントと併存する石器である。稲田氏の指摘したナイフ形石器の一型式が型式変化の単位をこえて、ポイントに形態変化するという図式は成立し難いようである。もっとも稲田論文の真価はポイントの出現過程の説明ではないのでこれについては後に詳しく論評してみたい。

実のところポイントの発生については現時点では、決定的な結論を見出すことは極めて困難である。ナイフ形石器の上限が、つい最近までは野川IV4



第1図 発生期ポイントの一例
(左端西之台Loc. BV中層縮尺±,
他は本夢川縮尺±)

期と想定されたのが、今日では西之台、鈴木(小平市鈴木遺跡調査会他1975)、三里塚No.55遺跡(古内1971)における如く、我国における後期旧石器時代初期の段階にまで遡ることが確認されたことを考えると、所謂、切出形石器、そしてポイントもその上限はまだ不確定であり、流動的である。しかし、ポイントが石器組成の中で安定した位置を占めるようになるのは相模野ではBB1の頃、つまり相模野第IV期(注2)とされる時期に、武蔵野台地では野川IV2期以後と言えることはできるであろう。そしていずれもその直前に白石氏の言うように角錐状石器が見られることは注意される。角錐状石器は小園前畑B2L下(神奈川県教委1972)、野川IV3a(IVc層)、西之台Loc. BV下層等で検出されているが、確かにポイントに比し粗いながらもブランディング的ではなく面的な調整が施されている。この角錐状石器については荒井幹夫氏等のナイフ形石器の一種であるとの反論があるが(荒井1971)、角錐状石器の全てが側縁に刃部をもつものばかりではなく、表面全面に調整を施したものも少なくない。特に翼状剥片とともに国府型ナイフが出土した山形県越中山K地点(加藤1975)には全面に加工された例が大多数を占める。西之台、星谷津遺跡(注3)例も同様であり、ナイフ形石器とはし難い。しかし初期のポイントに整った両面加工品の存在があることを考慮すると、角錐状石器がスムーズにポイントにつながる石器であるとは断定しえない。ナイフ形石器に見られる背面基部調整が両面加工への道を開いたともこじつけられないこともないが、ポイントからの逆作用の可能性もあり、依然としてその隔絶は大きい。ただ角錐状石器、そして付け加えるならば角錐状石器と同様、面的加工を有する揉錐器がポイントを生み出す、少なくとも技術的基盤を有していたことは許容できそうである。その3とした両面加工ポイントの突然の出現を根拠とした外来説は疑問視せざるをえない。エヌ・エヌ・ジコフは沿海州から日本に尖頭器が持ちこまれたらうという仮説を提起している(ジコフ1969)。しかし氏も述べているように沿海州、アムール領域の多くの未だ解明されていない文化という曖昧な表現しか用いておらず、沿アムールそして中間地域の北海道の様相が明らかにされなければ外来説は説得力がないであろう。ジコフが

指摘したカムチャッカのウシュキ1号遺跡7層のポイントの小形有舌ポイントに近似するものであって、氏の指摘するように武井IIに類似するものではない。押圧手法が用いられていることもウシュキ1号遺跡が、より下の時代のものと言えよう。一般に外来的なもの、特に第一次生産用具を受容する場合、それに応じる諸条件が整っていさえすればその普及は極めて急速なものであろうし(例えば石鏃は僅か土器一、二型式の間に本州全域に普遍化する。)、ポイントが出現後、かなりの期間にわたってその存在が貧弱なことは外來説が若干不利であることを示す。以上のようにポイントが内在的な発展と看做すことはできそうであるが、結論は今後の調査の集積によって明らかにされるまで残念ながら待たねばならないようである。

稲田論文の優れた点は石器群の器種・型式のあり方と技術基盤(素材と調整技法)との有機的な関係を構造として捉え、ポイントの出現、発達段階における石器群の構造的な理解にある。すなわちポイントの製作技法における平坦剥離と、もはや素材として石刃を必要としないという特殊な技術基盤が、初期には石刃あるいは石刃状剥片の素材として利用する度合を低下させ、発達期においては石器器種の調整技法が個別化し、それまでの一定の素材が全器種にわたる統一的基盤そのものを崩壊させるという図式を導きだしていることである。また稲田氏は発達期のポイント発展の意義を、(1)ポイントという、その大きさ、特に厚さと幅において石刃のワクを越えた器種の誕生が、画一的素材を崩し、石刃技法で頂点に達した石刃文化を根本的に否定し、(2)石器群の統一的な構造の崩壊は器種単位での個別化された発展を促し、新石器的な石器製作の発達の基盤を作り出したことであるという。そしてこうした石器群全体を発達させる原動力を、「日本列島が大陸から孤立したことによって、ナイフ文化末期における狩猟採集場は一定の飽和状態に近づき」、「狩猟採集活動のゆきづまりは、危険な大形獣狩猟を強制」し、「尖頭器文化の出現が、おそらくナウマン象やオオツノジカなどの大形獣の狩猟を日常的に可能ならしめた」という。一見、見事な立論であるが果してそうであろうか。

ポイントは石刃技法を部分的には崩していきようであるが、既に述べたようにポイントの初現は相当遡ることが事実関係として明らかであり、ナイフ形石器が多様化し、石刃もしくは刃器状剥片の上下両端を斜めに折断した発達したナイフ形石器が、Phase II B(注4)の段階の全期にわたって存在しており、そのいずれもが典型的な石刃ではないにしろ、縦長の刃器状剥片を素材としている。また一方では上下両設打面をもつ砂川型刃器技法に代表されるように新たな剥片剥離技術を作出しており、かえって刃器状剥片はやや小形化するものの多用されていく様相もみられる。もともとポイントが出現する以前を石刃技法という一つの限定された統一的基盤に求めること自体無理があると思われる。ポイント以前という層準的には武蔵野台地、下総台地ではIV層下層、確実にはV層(第1黒色帯)以下ということになるが、石刃技法の他にも礫をチョッパーのように交互に打ち欠く技法(例えば西之台、地藏坂(宮塚・矢島・鈴木1974))、剥片を数片剥離すると次は剥離面を新たな打面として石核を次々と回転して剥離する技法、(例えば千葉県三里塚No55(古内1971)、栃木県磯山(中村・山越1974))もみら

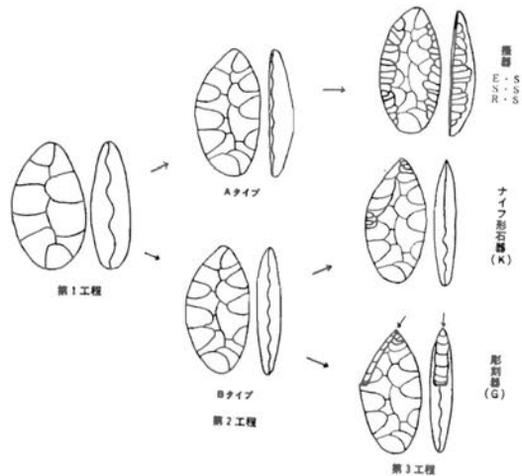
れ、得られる剥片は真正な刃器状剥片とは言い難い。また剥片石器の他にも、礫器、局部磨製楕円形石器等多様であり、それぞれの器種内に於て独立した基盤をもつようである。特に局部磨製石斧に関しては小田・キリー氏の論考に詳しい（小田・キリー1973）。少なくとも本州中央部の諸地域では石刃技法を一つの中核とはしながらも、その技術的基盤はそれほど強固なものではなく、かなりルーズな関係と言えそうである。ナイフ形石器の盛行期（ポイントとは既に存在）にかえて剥片石器が統一された基盤さえ持つように思われる。

石刃技法が急速な崩壊を進めていったのはPhase II Bの終末期近くである。層位的にはIII層に入ってからであるが、ポイントの石器群に占める位置が増大し、ナイフ形石器は一挙に消滅しはじめる。稲田氏の言うところではまだ初期尖頭器の段階であるが、ナイフ形石器、切出形石器の著しい減少、片面加工或は両面加工のポイント状のブランクを作り、その先端に撃打を加えて彫器、スクレイパー或はナイフ状の石器を作出する男女倉技法（第2図）の存在もある。言わばポイント、或はポイント状のブランクが複数の器種の基盤となっているかの如くである。そして後続する細石器段階で石刃技法は完全に消滅する（もっとも細石器自体もミニチュア化しただけで石刃技法と言えないこともないであろうが、稲田氏の言うように細石刃は独立的性格が強く、単一の器種の素材にしかかなりえていない）。ポイント出現の背景についてはファウナの問題もあり第4章にて詳述する。

3 ポイントの発達と機能

ポイントの主目的とする機能はもちろん刺突することにあるが、刺突具としての機能はナイフ形石器、切出形石器も有している。

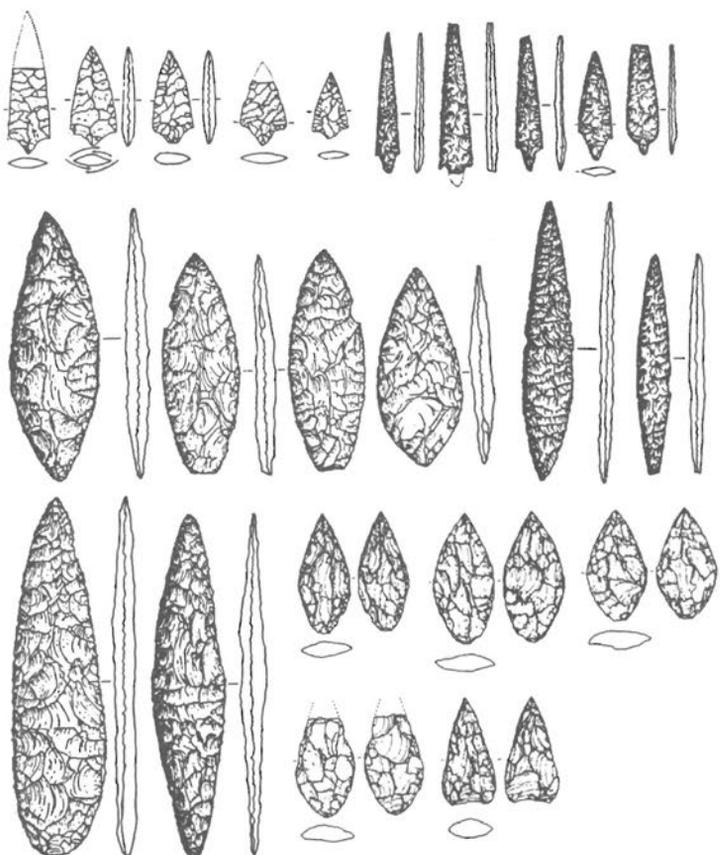
滝沢浩氏はかつて擦痕の観察からナイフ形石器を投射器としての用途を想定したことがあるが（滝沢1960）、弓矢の先、つまり石鏃としての用途は重量、身の反り方、また細石器から縄文文化初頭の段階における間の欠落が説明できない（注5）。しかし、ナイフ形石器の一部が槍先の先端あるいは逆刺としての用途は十分想定される。特にPhase II Bの幾何学的な形態を持った小形のナイフ形石器は単独石器としては使用できず、確証はないものの後の細石器的な着装法が推測できる。切出形石器も小田静夫氏によって石鏃との分析結果がある（小田1971小田氏は台形石器の中に切出形石器も含めている）。これもナイフ形石器より一般に小形とは言え、滝沢論文と同様の理由で認め得ない。やはり組合せ石器としての用途の方がより妥当性であろう。但し、素材を横に利用すること、一般にナイフ形石器に比べて身のそりが少なく分厚



第2図 男女倉技法模式図 森嶋稔(1975)より

いことは、小田氏の指摘通り、縦方向に対して著しく強度を高めることから組合せ石器としても先端部に装着された可能性が高い。先端に切出形石器を、側面にナイフ形石器を装着した鉞先形の石槍も十分想定しうることである。ポイントは、先端部の鋭利さに於てはナイフ形石器、切出形石器に一步を譲るが強度の面では遙かに優れており、切出形石器とともに組合せ石器の先端として用いられていたであろう。単独で使用されることもあったであろうが(特にPhase II B 終末期はナイフ形石器が減少していくことからその可能性がある)、細石器以後にみられる長大なポイントが殆んど皆無であることは組合せ石器として意識されたためかもしれない。細石器の段階に至っても千葉県木苅峠、星谷津遺跡のごとく小形のポイントが存在することは、組合せ石器におけるポイントの役割が減少するとはいえ依然として古い段階にみられた遺制を継承しているのであろう。一方、切出形石器もついにはポイントにその地位を奪われるとはいえ、刺突能力そのものはポイントと大差なく、また素材の一部にブランディングを施すのみで生産しうるという優利さも兼ねそなえていたため、強度に関しては弱点をもちながらも長期間にわたって、その存在価値を失わなかったと思われる。

ポイントは細石器直前つまりPhase II B の後半の段階で、石器群組成におけるウェートを急激に高めてくる。例えば月見野IV A 遺跡では下層(BB1)ではナイフ形石器39点(切出形石器を含む)に対し、ポイントは10点、中層(LIH)ではナイフ形石器21点(同)に対しポイントは31点、上層(LIS)ではナイフ形石器5点、ポイントは14点である。III A 遺跡では下層(BB1)でナイフ形石器8点、ポイント6点に対し、上層(L1)ではナイフ形石器2点、ポイント15点とポイントが優越してくる。そして細石器が使用されてきて(Phase III)、ポイントは一時的にウェート

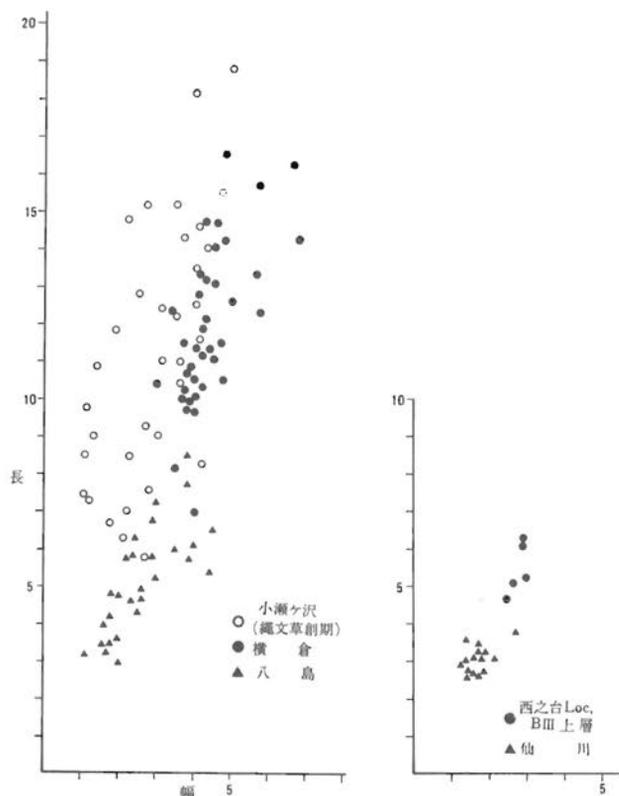


第3図 発達期尖頭器

(上段左から5例 柳又、下段右5例 西之台LOC, B 他は小瀬ヶ沢)

が低くなってくるが、消滅はしていない。千葉県木苅峠遺跡第10ユニット、同星谷津遺跡ではナイフ形石器も細々ではあるが存在している。但し、ナイフ形石器は細身の鋭利なものは著しく減少し、幅広で剝片の基部と背の上部に簡単な調整加工を施したもののみのものが多く、もはや刺突具としての機能は殆んど失われていくようである。しかし細石器段階を経過すると、ポイントは著しい発達をみせる。西之台Loc.B III上層、群馬県石山(相沢1967)長野県横倉(神田・永峰1958)、同神子柴(藤沢・林1961)に代表されよう。新潟県中林(芹沢1966)、本ノ木(芹沢・岡田1967)等、舌部の未発達の有舌ポイントを含むポイント群はやや後出するものと思われるが、Phase II B、IIIのポイントに比べると長大な一群が登場する。出土遺物全点を載せた報告書が少なく、統計的な対比が難しいのであるが、第1表は地域的に近い遺跡の計測値を図化したものである。ポイントの形状は多様となり、杏仁形形、扁桃形、柳葉形等、大小多種多様である。着装にも工夫がこらされ、基部を三角形に調整した有舌ポイントが出現している。本段階のポイントは横倉、神子柴、西之台Loc.B III層上にみられるように比較的扁平で基部側が広がった木葉形ポイントが多い。鋭く、薄い側縁は刺突力はもちろん、側刃器と同様の与傷能力を有していたと思われ、もはや側刃器を必要としなくなったのであろう。ここに組合せ石器の枠を始めて完全に逸脱したわけであり、単独石器としてのポイントの極盛期を迎える。石器群の組成は圧倒的にポイントの比率が高く絶対量も激増する。中林ではポイント104点、横倉では43点、石山では104点以上、南大溜袋では90点以上である。尖頭石器群はポイント以外には全く消滅する。

発達期のポイントは土器が出現した後もしばらくの間、隆盛を保っているが、石器の構成内容は大きく変化し、石鏃の発生と共に急速に衰微する。即ち、所謂、柳又型有舌ポイントの出現である。長身のものも新潟県小瀬ヶ沢(中村1960)等に存在するが、身に比べ幅があり一般に扁平で逆刺(かえり)が発達している。次第にポイントの中においてウェートを強めている。細隆起線文土器を出土した愛媛県上黒岩岩陰遺跡(江坂・西田1967、鈴木1971)ではポイント90点余に対し、有舌ポイントが



第1表 初期ポイントと発達期ポイントの比較

40数点に及び、岐阜県酒呑ジュリナ(澄田・大参1967、大参1970)、長野県小馬背、西又(木曾考古学研究会1973)、柳又(小林1965)では有舌ポイントが通常のポイントにはほぼ匹敵する数量となってくる。有舌ポイントの用途に関しては(1)石鏃と同様に弓矢の鏃、(2)槍先、(3)銚先、(4)投槍などが想定されているが、筆者はかつてこの縄文草創期の柳又、上黒岩型とされる特徴的な有舌ポイントを次の3点から投槍と仮定したことがある(鈴木1972)。

(1) 最も発達し、かつ広い分布をもつ上黒岩・柳又型の有舌ポイントが大きさ・重量ともに、石鏃と木葉形ポイントの中間的な位置にあり、かつある安定した範囲内にあること。

(2) 基部の両端が鋭で、最盛期のもは鋭い返しがあるのが多い。これは獲物に刺突された場合、逸脱を防ぐとともに傷口を広げ、出血を促して体力を消耗させ、追跡して捕獲をするのを容易ならしめるであろう。なかんずく上黒岩・柳又型の幅広で扁平な作りをもつ有舌ポイントは有効であったと思われる。小瀬ヶ沢洞穴の有舌ポイントに見られる鋸歯縁もこうした機能を増加したであろう。そしてこの基部末端の鋭さを生かすためには柄は基部の幅よりかなり細目にしなければならないが、上黒岩・柳又、とりわけ細身の小瀬ヶ沢の例などに、通常の手持ちの槍先として十分に耐えられる強度をもった柄がつくか疑問である(注6)。

(3) 木葉形ポイントが長野県荷取洞穴、同県石小屋洞穴、埼玉県橋立岩陰、新潟県室谷洞穴などの遺跡でやや時代を下っても残存するのに対し、有舌ポイントは石鏃の普及が進むと一挙に消滅してしまう。これは有舌ポイントの用途が弓矢に近似した関係にあり、しかも、その中に包括されてしまう性格をもっていたという可能性が考えられる。つまり、有舌ポイントを投槍と仮定した場合、刺突力、遠隔からの狙撃能力および正確度、大量携行の可能性などいずれにおいても弓矢の能力より劣るであろう。しかも、有舌ポイントと弓矢とにおいて狩猟対象の相違は全く認められず、いずれもイノシシ・ニホンジカを主体としている。投射器としてより効率の優れた弓矢に凌駕されていったと考えるのが妥当である。

もちろん通常のポイントも投槍として使用された場合も多かったことであろう。特に細石器段階及びそれ以前のポイントはむしろ投槍としての用途の方がより大であったかもしれない。しかし、通常形のポイントと有舌ポイントが、形態的にはもちろん、その大きさにおいて著しい隔差がみられてきたことは重要である。恐らく本来、槍にみられた2つの用途(突槍、投槍)のうち、投槍的な用途を主目的とする新たな尖頭石器が分化、発展をしてきた可能性は十分考えられることである。そしてこの柳又、上黒岩型の有舌ポイントを含むポイント群は発達の頂点にあると同時に最後の段階でもある。細隆起線土器の末期に弓射の技術が矢柄研磨器等と共に大陸より導入され少なくとも押圧縄文期までの短期間の間に本州、四国に一挙に普遍化される(九州では細石器が爪形土器以後迄存在し、有舌ポイントの段階を経ないで石鏃に転換する。つまり有舌ポイントの出現より僅かに遅れた石鏃はその拡散が極めて早かったことを示すかもしれない。あるいは台形石器の発達が有舌ポイントの導入を拒んだ可能性もあり、石器群の土器群の系統論の差は今後重要な課題であろう)。

4 ポイントの発展段階における狩猟相の変革

先土器時代の動物相は古生物学者によって明らかにされつつあるが、先土器時代の人類と直接関わりあった形での動物遺存体の出土例は殆んどないに等しい。僅かに長野県野尻湖、岩手県花泉(加藤晋平1975)化石床において野牛、ナウマン象、ヘラジカ、オオツノジカ、ヘミオストウマ、ノウサギの一種などの動物遺存体とともに、野牛の肋骨製のポイント、小数の石核、剥片が、野尻湖では剥片2点とスクレイパー、象牙の加工品が、ナウマン象、オオツノジカ、少量のニホンジカ、クマなどとともに出土している。また広島県馬渡岩陰遺跡(大阪市立博物館1976)では、縄文草創期の含包層より1枚下の層(V層)からオオツノジカが剥片とともに発見された。しかし、ナイフ形石器等の典型的なToolを欠いており、資料的にも貧弱なことから狩猟具の獲物の直接的な関係は決め手を欠いている。

さて、ポイントの現時点での初見はPhase II Aの終末からII Bの初めにかけてであるが、OB-FT法による年代は15,000年B. P前後の数値である。しかし既に述べたようにポイントが主体的な位置を占めてくるPhase II Bの終末期は仙川III(12,700±500 OB-FT)(小田1974)、月見野IV LIS-LIH(12,700±300 OB-FT)、木苅峠III 3(12,000±400 OB-FT)と絶対年代では2,000年強に及ぶ緩やかなポイントの発展期がある。そしてポイントが発達期を迎えるPhase IVは測定値が出された遺跡はないもののPhase IIIの木苅峠III 1(11,400±1,030 OB-FT)、向原III上層(10,700±500)、休場(11,100±700 OB-FT)、矢出川(9,400± OB-FT、10,900±200 OB-FT)以後ということになる。一方、ナウマン象、オオツノジカ、野牛などヴェルム氷期の大型哺乳類は野尻湖(上層16,150±550、中層21,600±900、下層31,000±2,500 C14)、塩田平(28,400±C14)、花泉(上部21,430±800、下部28,070±1,100 C14)(湊1974)で吐中層(15,750±390 C14)が現在日本におけるオオツノジカの最後の層準である(湊・態野1969)一般にC14法の方がOB-FT法より古い数値が出る傾向(例えば休場はC14法は14,300、荒屋13,200±350、上黒岩IX 12,165±600、福井III 12,700±500)もあるので直接対比はできず、相当割引しなければならないが、ポイントの初現期には既にナウマン象は絶滅もしくはそれに近い状態、オオツノジカ等も地域的に限定されていたであろうし、もちろんポイントの最盛期には完全に絶滅していよう(7)。仮にいずれかの地域に残存していたとしても、もはや日常的な狩猟の対象にはなり得なかったであろう。発達期ポイントの後半期である縄文草創期初頭の上黒岩岩陰VI~IX層(金子1967・鈴木1971)、埼玉県橋立岩陰(芹沢他1967)、栃木県大谷寺洞穴(天開山大谷寺1972)、新潟県小瀬ヶ沢洞穴、山形県日向洞穴(直良1958)等、数多くの遺跡でこうしたヴェルム氷期に栄えた大型哺乳類が全く検出されていないことは(第2, 3表)、時間的には些程の差はないと思われる発達期ポイント前期(Phase IV)、細石器段階(Phase III)の狩猟動物相も発達期後半と極端な差はなくイノシシ、ニホンジカを主体にカモシカ、ツキノワグマ、ニホンザル等の沖積世の動物群がその主な対象であったことは殆んど疑いない。したがっ

	B~D区 8・9層 細隆線文土器 木葉形尖頭器 有舌尖頭器	A区 6・7層 細隆線文土器 木葉形尖頭器 有舌尖頭器	B~D区 6層、 無文土器？ 石	A~D区 4層 押形文土器 骨製尖頭器 石	A~D区 3層 轟式土器 石	A~D区 1・2層 縄文後晩期 (表土は攪乱)	合 計
イノシシ	11	2	9~10 (B区~7層のものを含めば10)	9 (5層への落込みを含む)	1		草創期分 22-23 押形文以後 10 33頭
ニホンシカ	8	1	9	12	1	9 (1層を含む)	18 22 40
ニホンザル	6	3	4	3		1	13 4 17
ツキノワグマ	3		1				4 0 4
カモシカ	1		1				2 0 2
アナグマ	4		1	1			5 1 6(+α) (層位不明)
ムササビ			4	1~2		2 (1層を含む)	4 3~4 7~8
クヌギ				3	1	2 (1層)	0 6 6
テン		1		1			1 1 2(+α) (層位不明)
オオヤマネコ	1				1	1	1 2 3
ノウサギ				1 (5層への落込み)	1	1	0 3 3
ニホンイヌ				2	1	1	0 4 4
ハクネズミ				2			0 2 2
オコシヨ				1			0 1 1
ニホカミ	1						1 1 1

第2表 縄文草創期及び早期の哺乳類遺存体の個体数の1例(上黒岩 第1, 2, 4次調査分)

てポイントの出現、そしてその発達がナウマン象、オオツノジカ、原牛等の古型大形獣の捕獲と直接的な関係をもっていたとする見解（例えば稲田1969）は明らかに誤謬である。むしろ、ナイフ形石器の多様化、量的増大、切出形石器、ポイントの発生・発達と、狩猟具における改革が次々と進められていったのは、日本列島の島嶼化のためとり残された古型大形獣の捕獲の限界を意味し、除々に変遷していく後永期型の狩猟相への長い過渡期であると言えるのではなかろうか。そして細石器直前の段階では完全に沖積世型の狩猟相へ変化を遂げ、細石器、発達達期ポイントは新しい環境への適応の段階的な画期を示すのであろう。狩猟の協業等に関しては、一定地域内における稠密なセトルメント・パターンの解明なくしては見解を述べえない。今後の大きな課題ではあるが、現時点では時期尚早である。さて、柳又、上黒岩型の有舌ポイントをもって突槍、投槍を主体とした旧石器的な狩猟法は頂点に達すると思われるが、土器の出現に殆んど相前後して登場した弓射の技術の伝播によって「槍」から、弓の反発力、弦の張

道 跡 名	ニホンジカ	カモシカ	イノシシ	カワウソ	アナグマ	テウチ	イタチ	ツキノワグマ	キツネ	タヌキ	ニホンオオカミ	ニホンイヌ	オオヤマネコ	ノウサギ	ムササビ	ニッコウムササビ	モグラ	オコジヨ	ニホンザル	ネズミ	伴 出 土 器 そ の 他
1 長崎県福井岩除	○		○																		隆帯・爪形文他
2 岩下洞穴6層	○																				爪形・押型・条痕・無文
＊ 5層	○	○																			爪形・押型・轟・管細・無文他
＊ 4層	○	○	○																		爪形・押型・轟・管細・阿高・無文他
3 愛媛県上黒岩9層	●	○	●		○			○					○								オオヤマネコは3層(轟式土器)にもあり。細隆起線文。
＊ 7層	○	○			○																細隆起線文
＊ 6層	●	○	●	○	○			○													ニホンジカはイノシシより多。無文。
＊ 4層	●	●		○	○			○						○	○						押型文
4 高知県不動ヶ岩層	○	○	○				○	○							○						ムササビはキュウシュウムササビ。細隆起線文・押型文・無文他
5 広島県馬渡岩除	○																				無文
6 新潟県小瀬ヶ沢	○							○													—
7 ＊ 室谷下層	○	○			○			○							○						室谷下層式
＊ 4・5層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	縄文・撫系文・井草系他
＊ 3層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	花横下層・茅山・常世・卯ノ木・田戸下層・三戸系
8 山形県日向3層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	微隆起線・爪形・押圧縄文・無文他
＊ 2-3層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
9 埼玉県橋立岩除	○	○	○		○			○							○?						上層にテン・ニッコウムササビ出土。細隆起線・爪形・無文
10 栃木県大谷寺洞穴	○	○								○					○						ニホンイヌ・タヌキ・キジは撫系文・沈線文以後。細・微隆起線・爪形・無文他
11 長野県樹原洞穴	○	○	○		○			○		○											この他、リスの出土もある。
12 岐阜県根方岩除	○	○			○			○													イノシシはシカの約倍の個体数出土。
13 岩手県蛇王堂	○	○	○							○											ノウサギは層序不明。シカはイノシシより多。日計・蛇王堂II他
14 千葉県西ノ城貝塚	○	○																			井草～茅山
15 ＊ 城ノ台貝塚	○	○													○						井草・夏島・花輪台・○田戸下層・田戸上層・子母口・茅山
16 ＊ 遠崎貝塚	○	○													○						○花輪台II・三戸・田戸下層・植房
17 ＊ 飛ノ台貝塚	○	○																			茅山他
18 茨城県花輪台貝塚	○	○																			イヌは西村1971にあり。花輪台・夏島
19 神奈川県夏島貝塚第1貝層	○	○	○?												○	○	○	○	○	○	ガン・カモ科の一種の出土もあり
＊ 第1説土貝層	○	○																			キジ・ガン・カモ科の一種の出土もあり
＊ 第2貝層	○	○																			—
＊ 第3貝層	○	○																			—
20 ＊ 平坂貝塚貝層	○	○	○																		撫系・押型・田戸下層・平坂
＊ 貝層下土層	○	○																			—
21 ＊ 茅山貝塚	○	○																			野鳥・茅山

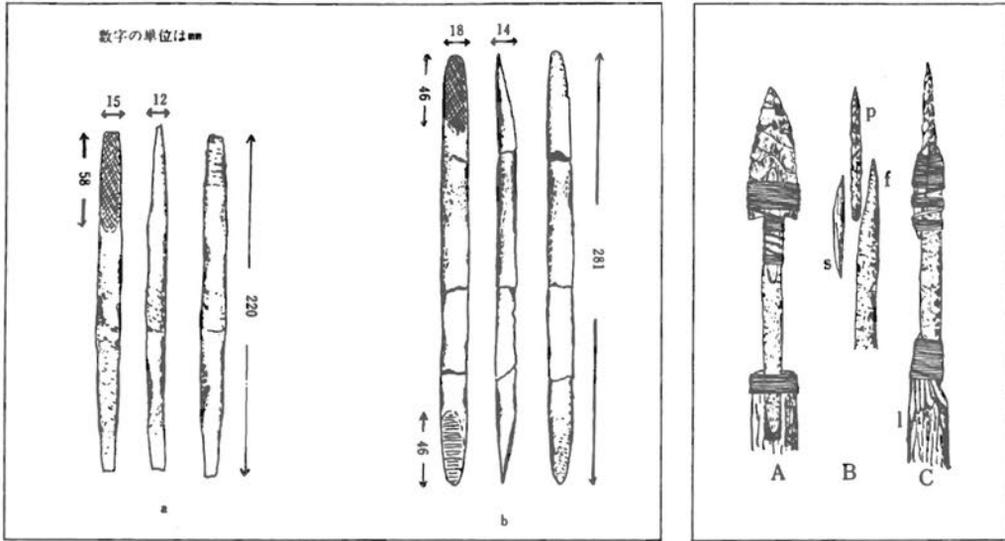
第3表 縄文草創期における哺乳動物遺存体

力という物理的な力を初めて本格的に応用した新しい狩猟具「弓矢」へと変化する。弓矢は場所を選ばず投槍よりもより正確に遠隔操作ができ、多数の矢の携行が可能であり、石鏃の製作はポイントより遙かに経済的であった。道具の改良というよりもむしろ革命的な新兵器、弓の登場によって旧石器的な狩猟法は完全に消滅するのである。そして、撚糸文系土器文化期の初期には海水面へ適応を果し、貝類の本格的な採集、漁撈具の発展を開始し、一方、狩猟に於ては家犬の使用を始め、狩猟対象の枠を小形獣の捕獲にまで拡大していったのである。末尾ながら本小稿を草するに当り、永峰光一、中村恵次、西野元、杉原重夫、小田静夫、田坂美代子、山本暉久氏ら諸先学および文化財センターの同僚諸氏には数々の御数示、御援助を載いた。特に田坂氏には第1編の作図に多大な御助力を賜った。厚く謝意を表する。(3月19日脱稿)

注

- 1 小田静夫氏の御教示による。
- 2 相模野台地では先土器時代を相模野Ⅰ～Ⅳ期に分類している。例えば神奈川県教育委員会(1972)『綾瀬町文化財調査報告』第一集
- 3 昭和50年4月30日～51年3月25日、文化財センターによって発掘調査された。概要は本紀要第1編に述べてある。
- 4 小田静夫、C.T. キーリーは先土器時代をPhaseⅠ～PhaseⅣに区分した。従来の限られた資料による特定石器の直線的な羅列の編年観を是正したもので、現時点では最も優れた編年区分であろう。PhaseⅡはナイフ形石器の隆盛期で製作手法の相異等によってPhaseⅡAとⅡBのSub-Phaseに分類される。PhaseⅡBは折断手法が盛に利用された段階である。(小田静夫、C.T. キーリー、武蔵野公園遺跡Ⅰ1973)
- 5 細石器段階のファウナは縄文文化初頭器と極端な差はないようである。優れた狩猟具である弓矢が細石器段階以前に存在し、細石器及び発達期ポイントの段階で消滅し、縄文時代に入って再び台頭するという跛行的な現象はファウナが洪積世型から沖積世型へ変遷する中で全く説明できない。ポイントが細石器段階で一時欠落する遺跡もみられるのは、初期ポイント自体が組合せ石器の一部であって、細石刃の発達が先端部を必要としない程になった(例えば杉原荘介、『日本先土器時代の研究』講談社1974)と考えるべきであり、単独石器(それも主要な第1次生産用具)の消長とは決定的に意味が異なる。
- 6 最近、北アメリカのクロービス型の投槍について知見を得た。ラリー・ラーレン、ロブスン・ボニッチェンの連名で1974年10月11日付のサイエンス誌に紹介されている。原文はまだ入手していないが、「国土と教育29」に詳しく述べられている。クロービス型のポイント着脱法は独特で、木製の柄と骨角器で作成された中間柄が分離する(第4図)。すなわち獲物に深く突きささった先端部はポイントの逆刺によって体内に残り、柄は着脱する「ハナレ」である。先端のスペアを用意するだけで、重い木製柄は小数で済む利点があり、また体内に深く刺突され、しかもそのまま残置されることは獲物の体力を著しく弱らせよう。ポイントとしては最

も発達したものと云えるであろう。着脱式の投槍は逆刺を有することが不可欠の条件である。我国においてこうした着脱法が存在したかは、中間柄の発見を待たねばならないが、柳又、上黒岩型の扁平で逆刺の発達した有舌ポイントの使用法を暗示するものかもしれない。今後、鹿角或は骨製尖頭器と呼ばれるものの再検討が必要であろう。



アンジック遺産の骨製フォアシャフト。いずれも左から、腹面、側面、背面。
aは斜めの切断部腹面には斜交するすじが、背面には長軸に直交する切りこみがつけられている。bは、両端が斜めに切断され、一方の切断面には斜めの、他方の切断面には長軸に直交するすじが、それぞれきざみこまれている。

フォアシャフトによる接続の復元図。Aは図1aのタイプ、cはbのタイプ。Cは図1bのタイプ。
p:石のヤリ先、f:フォアシャフト、s:そえ木、l:木製の柄

第4図 クロービス型ポイントの着脱法

7 小林達雄氏はナイフ形石器、ポイントをもたず、石器の器種が少ないことから花泉、野尻湖をPhase Iではないかと推定している。小林達雄(1974)「1.概説」『日本の旧石器文化』2 遺跡と遺物 雄山閣

文献

- 相沢忠洋 (1976) 「群馬県赤堀石山遺跡」 考古学ジャーナル9号
 荒井幹夫、実川順一、田中英司、織笠昭 (1971) 「大宮台地の先土器時代新資料(続) Prehistory 25
 稲田孝司 (1969) 「尖頭器文化の出現と旧石器的器製作の解体」 考古学研究第15巻3号
 江坂輝弥、西田栄 (1967) 「愛媛県上黒岩岩陰遺跡」 『日本の洞穴遺跡』 平凡社
 大参義一 (1970) 「酒吞ジュリナ遺跡(2)」 名古屋大学文学部研究論集 50
 Oda Shizuo and Charles T. Keally (1973) Edge-ground stone tools from the Japanese preceramic culture 物質文化 22
 大阪市立博物館 (1976) 「帝釈峽洞窟遺跡 -日本原人の謎をさぐる-」 第70回特別展目録
 小田静夫 (1971) 「台形石器について」 物質文化 18
 同上 (1974) 『調布市仙川遺跡』 東京都埋蔵文化財調査報告第2集

- 加藤晋平 (1975) 「岩手県花泉化石床出土の人類遺品」 月刊文化財 第138号
- 加藤 稔 (1975) 「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』 2.遺跡と遺物 (上) 雄山閣
- 神奈川県綾瀬町教育委員会 (1972) 「綾瀬町文化財調査報告」 第一集-小園前畑遺跡発掘調査報告書-
- 金子浩昌 (1967) 「洞穴遺跡の動物遺存体」『日本の洞穴遺跡』 平凡社
- 亀井節夫 (1965) 「II 日本第四紀の自然4動物」『日本の考古学 I』 河出書房
- 神田五六・永峰光一 (1958) 「奥信濃横倉遺跡」 石器時代 5号
- 木曾考古学研究会 (1973) 開田高原小馬瀬、西又II遺跡出土遺物中心の縄文時代草創期学習会資料
- 小平市鈴木遺跡調査会、小平市教育委員会 (1975) 『小平市鈴木遺跡』
- 小林達雄 (1965) 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」 信濃第17巻4号
- 小林達雄, 小田静夫, 羽鳥謙三, 鈴木正男 (1971) 野川先土器時代遺跡の研究
- 白石浩之 (1974) 「尖頭器出現過程における内容と評価」 信濃第26巻1号
- 杉原荘介, 小野真一 (1965) 「静岡県休場遺跡における細石器文化」 考古学集刊第3巻2号
- 鈴木道之助 (1972) 縄文時代草創期初頭の狩猟活動-有舌尖頭器の終焉と石鏃の出現をめぐって-
考古学ジャーナル No.76
- 同上 (1975) 「木苜峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 III
- 砂川遺跡調査団 (1974) 『砂川先土器時代遺跡 埼玉県所沢市砂川遺跡の第2次調査』
- 澄田正一, 大参義一 (1967) 『酒吞ジュリナ遺跡-わが国土器文化発生期の一様相-』 名古屋大
大学文学部研究論集 44
- 芹沢長介 (1966) 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大学日本文化研究所研究報告』
第2集
- 芹沢長介, 中山淳子 (1967) 「新潟県津南町本ノ木遺跡発掘調査略報」 越佐研究 12
- 第5次野尻湖発掘調査団編 (1973) 「野尻湖発掘の記録II」 国土と教育 21
- 高木博彦, 千葉健造 (1974) 「向原遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 II
- 滝沢 浩 (1964) 「ナイフ形石器の機能」 下総考古学 1.
- 天開山大谷寺 (1972) 『大谷寺洞穴遺跡』
- 所沢市教育委員会 (1974) 『砂川先土器時代遺跡-埼玉県所沢市砂川遺跡の第2次調査-』
- 戸沢充則 (1957) 「長野県八島遺跡における石器群の研究」 駿台史学第8号
- 戸沢充則 (1964) 「矢出川遺跡」 考古学集刊第2巻3号
- 戸沢充則 (1965) 「尖頭器文化」『日本の考古学』 I 河出書房
- 戸沢充則 (1971) 「小林, 小田, 羽鳥, 鈴木論文に対する論評」 第四紀研究第10巻4号
- 直良信夫 (1958) 「日向洞窟発掘自然遺物」 山形考古 5
- 中村孝三郎 (1960) 『小瀬ヶ沢洞窟』 長岡市立科学博物館研究調査報告 3
- 中村紀男, 山越茂 (1974) 「磯山遺跡発掘調査報告』
- 樋口昇一, 森嶋稔, 小林達雄 (1965) 「木曾開田高原における縄文以前の文化」 信濃 17-6

- 藤沢宗平, 林茂樹 (1961) 「神子柴遺跡」 古代学 第9巻3号
- 古内 茂 (1971) 「No.55遺跡」 『三里塚-新東京国際空港用地内の調査-』
- 湊 正雄 (1974) 『日本の第四系』 築地書館
- 湊正雄, 態野純男 (1969) 「洪積世から沖積世へ-自然変化の素因と古生物」
『新版考古学講座』 3
- 宮塚義人, 矢島国雄, 鈴木次郎 (1974) 「神奈川県本蓼川遺跡の石器群について」 史館 第3号
- 同 上 (1974) 『綾瀬町文化財調査報告 第二集-地蔵坂遺跡発掘調査報告
-』
- 明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 (1969) 『概報月見野遺跡群』
- 森嶋稔・川上元 (1975) 『男女倉-国道142号新和田トンネル有料道路事業地内緊急発掘調査報告書』